

管季治：「文芸的心理学への試み」序説(その3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007959

菅季治：「文芸的心理学への試み」序説 （その3）

小田切 正*

「天の下にあるものはすべて、同じ法則、同じ運命のもと、すべては同一の自然の相の下に現れるにすぎない。人間を縛って、この秩序の柵の内に拘束しなければならない」

菅 季治（1917-1950）の「人生の論理—文芸的心理学への試み」の「前かき」に、モンテニョからかりたこのことばがある。地上にあるすべてのもの、そして人間すべて上も下もなく同一であり、「宇宙における人間の位置」についての、このただしい自覚がいまや必要だという。現実の人間の、この理念とはなんとひどくかけ離れていることだろうか、たがいに傷つけあい倒し合う人間、けがれ歪んでいる人間、争いのなかの傷つけあう人間を見聞きするくらいかなしいことはない、と菅はいう。

本稿では、ひきつづき戦中におけるひとりの哲学徒の、人間心理の内面をとらえた思索と行動（観察と記録）をあきらかにしたが、その文学、哲学、思想、文芸をかりた臨床的な研究方法のなかに、今日のあらたな教育的人間学の構築への手順も期待できると思われる。とくに今回は、菅のキエルケゴールの考察から多くとった。

末尾に、「人生の論理」から「孤独」「弱い魂」「たいくつ」の各節を資料掲載とした。

（キーワード；菅 季治 「人生の論理」 キエルケゴール 「死に至る病」）

1. 「世間」のなかの人間について

—キエルケゴールから（その1）

菅の人間心理をとらえた「論述」に、キエルケゴール（Soren Kierkegaard, 1813-55）の「死に至る病」の影響があることは、すでにみたとおりである。（1894年公刊、斎藤信治訳 昭和14年11月初版、岩波文庫）

その序には「人間が全く彼自身であろうとあえてすること、一人の個体的な人間、この特定の個体的な人間であえてすることである—かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任をひとりで担いながら、神の前にただひとりで立つことである」とある。キリスト教においては、地上的な肉体的な意味の、死に至る病いということは、まったく考えられない。死がさいごのものではないからである。

ここでいう「死に至る病」とは、終局が死であるような、死が終局であるような病いだということになる。そして、まさにこのような人の生のあり方が絶望にほかならない、とキエルケゴールはいうのである。また別の意味でも、絶望は「死に至る病」でもある。その者は、死（その救済と往生）という最後の希望さえもつことができないほど、希望がすべて失われており、死にうるという希望さえそこにはないからである。

したがってここにいる「心理学的論述」とは、この人間の病い（絶望）のあり方、その病いから脱けでることができない人間心理そのものをつかむことだということになる。キリスト者からみた人間の、こうした絶望と頹廢の形について、「死に至る病」の一節につぎのようにある。

「（上略）世間ではいつでもどうでもいいことが一番問題にされる、一体どうでも

* 前北海道教育大学旭川校

いいことに無限の価値を賦與するというのが世間というものなのである。(中略) 一体およそ人間はもともと自己自身となるべしという使命をもった自己として創られている。(中略) 人間は人間に対する恐怖の故に、自己の本質的な偶然性に於て、自己自身であることを放棄してはならない(中略) 人間は絶望の一つの仕方において彼はいわば自分の自己を「他人」からもらいうけるのである。そのような人間は自分の周囲にある多くの人間の群を見、あらゆる世間的な事柄との関係のなかにはいり込み、世間のやりかたを理解するにおよんで、自分自身を忘却して……他人と同じようにある方がずっと楽で、ずっと安全だというような気持ちになる、一かくて彼自身であることの代りに群衆のなかの一単位に墮するのである。」(旧版 52-53頁)¹⁾

いましばらく、キエルケゴールをみたのは、菅が「人生の論理」でくりかえしとりあげているのも、「死に至る病」のなかでも、とくにこの文脈だからである。自己が自己自身であることをあえてするには、勇気のいることだ、そうすることができなければ、「自己自身を放棄」し、「世間」と同じようにするほかない—ここには、キエルケゴールをかりた菅自身の、「世間」一般にたいする、そしてあまりも多く、絶望的な、希望のない戦時の危うさにたいする、痛烈な批判をよみとることができる。もはや追いつめられては、どんな意味でも自己をもつということはゆるされない状況である。

では、そのような「自己放棄」「自己喪失」といったものがどのようにすすめられ、行なわれるだろうか。

その考察が、さきのキエルケゴールからのびて、「世間」の論理とはなにか、それが人のあいだでどのようににはたらき、なにをもたらしのか、の人の関係にむけた分析の目から、同時にそうした「世間」をかたちづくっている権力の

根底へおよんでいるのもみごとである。「世間が自分にしたがわず自分を否定するものにたいする否定は、はげしくしつこい」、「おれの言うことを聞かぬ奴は生かして置かん」というのが権力者のいい分だ—菅はそういうのである。菅のいうその「世間」の心理と論理とは、少しながくなるがつぎのものである。

『「真実にもっとも危険なこと、および最悪なこと(自分自身を喪失すること)が、世間ではまるで何でもなかったかのようにきわめて静かに経過し得るのである」(キエルケゴール「死に至る病」(注、下線は筆者のもの)

世間というもののあり方も、やはり論理的である。それは自分を肯定し、自己同一を得また保とうとする。そして自分を否定するものを否定するのである。世間は……自分と異なり自分にてむかうもの、自分の目障りとなるもの(注、草美社版では「自分の安定をゆるがすもの」となっている)、つまり自分を否定するものとして、否定しようとする。こういう人間を世間は嘲りからかう、仲間はずれにする、爪はじきする。そして哀れな変わり者が餓え死にしたり、行き倒れになるのを見て「ざまあ見ろ!」とよろこび威張る』

『世間が自分にしたがわず自分を否定するものにたいする否定は、はげしくしつこい。それは「おれの言うことを聞かぬ奴は、生かして置かん」とうそぶく専制君主みたいなものである。世間のこのすさまじい否定性に打たれて多くの人は降伏する。世間に「身売り」するのである。(中略) そして世間に忠実に生きる人は、権力者に保護されているたのもしさ、安らかさを感じもするだろう。(中略)—こうして彼は彼自身であることの代わりに群衆のなかの一単位に墮するのである。」そして今では、「彼は小石のように滑らかに擦り減らされており、現行貨幣のように通りがいい。世間は彼を、絶望していると見なすど

ころか、人間はすべてこうあるべきものと考えるのである。』（136－139頁、本紀要14号の拙稿中の資料のうち〔七世間〕、また本号掲載の資料〔四孤独〕をごらんいただきたい。）

ところで、いまみた菅の戦中の思想で注目しなければならないのは、キリスト者であるか、そうでないかは問わず、その斎藤の旧訳「死に至る病」が、どのような人によって、そのなにがどのように理解され、かつ読みつがれたかなど、その読者層にあたえた影響については、いまもってあきらかでないことである。キエルケゴールを理解するのが、困難な作業だということも考えておかねばならない。これらは、戦中の哲学史研究の課題であるが、学徒のまま出征した者にかぎってみても、その読書体験をもつ者は、ごく稀な場合であるように思われる。

（たとえば「きけ、わだつみの声」1集、2集には、いまのところみあたらない）

菅によれば、人間、生きるとは、どこまでも「ダイナミッシュな自己同一」をもとめた、自己自身の探求でなければならない、それだけにいっそう歴史のいまと、自己自身をみつめないではいられなかったのである。もういちど、さきのキエルケゴールをみてみたい。

「真実にもっとも危険なこと、および最悪なこと（自分自身を喪失すること）が、世間ではまるで何でもなかったかのようにきわめて静かに経過し得るのである。」と。

この引用のなかに、歴史をみる観察者としての菅の冷静な目とともに、真実の危うさにたいする、痛切な思いをにじませた菅の胸中がみてとれるだろう。

菅は、「世間」について、いまや自分にしたくない者、「いな（NO）」というものになりたいとする否定は、「はげしく、しつこい」と書いた。そのはげしさ、しつこさは、「目障りなもの」「てむかうもの」「安定をゆるがすもの」などに徹底してむけられるというのである。多

数の者による他者の「仲間はずし」、他の「爪はじき」がそれである。どこか人には、自分に理解できる程度にひきさげるという傾向があるし、自分たちの足もとの「凡俗」のなかに人を倒そうとすることがある、という事例をあげているのも注目されてよい。

そのばあい「他者」「他の人」とは、自己にたいする「なにかほかのもの」「なにか欠けているもの」、はたまた「偶然なもの」かいなか－菅のもう一つの遺著「哲学の論理」の主題となっているのが、この「他者」とはなにか、をめぐる、人間関係論の考察というべきもののなのである。

これについては、他の機会に考察したので、ここではとりあげないが、こうした「他者」「他の人」をかけがえのない「価値のあるもの」、自分にとって「最高のもの」として、人間「共同体」をめざしたのが、菅のいう「救いとしての哲学」の立脚点でもあったのである。²¹

「人生の論理」に、ノート原稿があることについては、すでにふれておいたが、これには戦後の草美社刊にはない、菅の戦中記録がいくつかある。このなかの、菅のいう「救いとしての哲学」とは、つぎのものである。

「知ること」「考えることが、人間の最大のよろこび」であるような世の中、社会とはなにか、そしてすべてのものが、生きることがよろこびであるようなあり方の学問が哲学であるなら、その探求こそが「救いとしての哲学」だとしたうえで、つぎのように書いている。

「たとえ内外のありさまが、考えるものとして生きることがどんなに妨げくずそうするときも、私たちは、それに堪えて、人間を真に人間であらせ、ものとして完成する（注、菅はすべてものといういい方をする）この生き方へのきもちをふるいおこさなければならない。たとえばヘーゲルのことばを思い出して。

”真理への勇気、精神の内面への信念、これが哲学研究の第一の条件だ、人間は自分自

身を尊重し、そして自分を最高のものに価すると信ずるべきである。精神の偉大さ、及びその内面力は、人間がどんなにこれを大きく考えようとも過ぎることではない。」

こうしてすべての人間が、最高のものとして尊重されるような、人間の第一条件をめざした「救い」としての真実の哲学が、菅のいうプラクシスのまさに核心のものだったと考えられる。

2. 柔軟で深刻な人間の探求者であってこそ —キエルケゴールから（その2）

これまで、菅のキエルケゴール理解についてみてきたが、いまだ少し、その理解をほりさげておきたい。

人が自分自身が否定されるということは、ひどくつらいことである。人間の内心の自己同一への欲求は、人一倍つよい。自分の思いや感情が人に受け入れられてこそ、よろこびも大きくなるし、生きがいをもつことができるというものである。

14号でくわしくみたが、スピノザにならって菅は、人間の感情・欲望の基本となっているのが、よろこび（快）であり、それがあって自己同一が保たれるという。それと反対に、不快（かなしみ）がふかければふかいだけ、自分のみじめさ、至らなさ、やりきれなさを思い知らされるということになる。そのかなしみ（不快）に耐えて、否定するものを否定して、自分の自己同一を保つというのが、人間のあり方の根本である、と。こうして他から受ける、否定のさまざまと、それに耐えてのりこえていく、人間のありのままをとらえ、打開のみちを探ろうというのが、菅の心理学によせる基本の立場でもある。

菅のあげている事例、文学からの引例、社会批評といったものから、日常の人間心理の機微をとらえたものまで、じつにさまざまな人間を登場させていて、そのみる目はあたたかく、ときにははっとさせられ、ときにクールでさえある。

菅自身のもちまえのものと思われるユーモア、笑いもあるし、ドキドキするような会話、自己分裂で苦しんでいる子ども、青年への共感など、豊富な事例考察があるのも「人生の論理」の迫力である。

・いつも人のまえでぺこぺこしている人は、かげでは、人一倍ながく腰をのばすにちがいない。なぜなら、人間、存在している以上、どこか自分を回復しないではいられないし、自分をもちあげる工作需要である。自分を否定する相手がいないところで、きみは、舌をだすだろうし、その人を引きずりおろすだろう。「おれにあたまをさげさせる奴、死んでしまえ」と。（14号、資料のうち〔八 卑屈〕から）

・「弱い魂も、はじめは自分の弱さ、脆さを認めようとはしないかもしれない。弱さ、脆さは不完全なあり方であり、自分をそのようなあり方において認めることは、みじめな不快を感じるから（である）。かえって自分の強さをしめすことに務めさえするのであろう。気の弱い子どもは、臆病、小胆 と思われたくないために、ナイフで自分の指を切ったり、高いところから飛び降りて見せる……「豪放らしく」そうに見える人が、そのじつ恐ろしく気が小さく細かい性質であることが、しばしばあることである。」（本号、資料のうち〔六 弱い魂〕から）

・「相変わらずチョコチョコ飛びまわっていなさるな？」「わたしはお金をしこたま持っていますんでな、それでせっせと飛びまわっているんですよ。」「一知恵と良心がありゃ、金なんかなくなっちゃってけっこういけるさ……だいたい金なんてものは、人間の良心が消えはじめたときに姿をあらわしてくるものだ……良心が少なくなればなるほど、金はたまってくるものさ。一なるほどもっともですな……世の中にや、金もなければ良心もないというような人間もありましてな……」（「人生の論理」67-68頁）

人とのあいだで生きるのが人間であるかぎり、その人間のありのままの理解があって、だれもが人のあいだで生きることが出来る。そして、こうした理解のもとで、その人のなにかがだいじであり、なにが必要かその人の真実に共感していくというこもできていくのである。だが、そのような場合と反対に、かなしみがふかく、自分のみじめさ、くるしさを否定しようにも、否定できない、自己同一を回復しようにも、そのうけた傷口があまりにふかいときは、人間どうなるか—自分ひとりではとうてい耐えられないその「地獄」においてはどうなるだろうか。他の人が近寄って、その苦痛や不幸、かなしみを探ろうとすると、だまりこくするか、沈黙するか、他をさけようとする、そしてひそかな打ちあけ相手としては、もう他の人間ではだめだ、というのが「孤独地獄」だ、と菅は書いている。

たとえ他の人が自分と情を同じくしてくれたとしても、それはほんの一時のことである。人間の自己同一への欲望—自分でありたい、自分を否定されたくないという気もちが、人間、生きることの原動力だとすると、人のなかの失望、その極限としての絶望は、かぎりなくかなしい。菅は、こうした自己同一を失なった「絶望の人」が、どのようにその胸中をかくし、ふるまいを偽装までするかについて、キエルケゴールからつぎのものをひいている。人間の絶望とはなにか、を徹底して知るには、その人間の行動とこころの深部の、まさに柔軟で、深刻な探求者であるほかないのである。

「そういうふうに絶望している者は、自分の悩みのなかで絶望的にかれ自身であろうと欲する。肉体のこの刺は自分のうちに非常に深くささりこんでいるので、とうていそれを引き抜くことはできないものとかれは確信している。それ故に、かれはもはやそれを引き抜こうとはしない、いわばそれを永遠に自分の身に引受けよう欲するのである。(中略) そしてもはや反抗的に彼自身の苦悩を誇りと

しながら、自分を保持しようと欲する。」

(「人生の論理」56—57頁, 旧版 114頁)

「絶望して彼自身であろうと欲するところの苦悩者のうちに、意識がより多く存在すればするほど、それだけまた絶望の度もつよくなってそれはついに悪魔的なものにまでいたる。(中略) いかにしても自分の具体的自己から除き去ることも切り離すこともできない、ある苦痛のために苦悩する。さて当人はまさにこの苦悩にむかって、かれの全情熱をそそぎかけるので、それがついに悪魔的な狂暴となるのである。そのときになってよし天に座す神とすべての天使たちとが、かれに救いの手をさしのべようとも、かれはもはやそれを断じて受け入れようとはしない、いまとなってはもう遅すぎるのである。(中略) いまやかれは、むしろあらゆるものに狂暴になりたいのである。かれは全世界から、全存在から不当な取扱いを受けている者として、あらゆるものにむかって狂暴に振舞う権利がある者になりたいのである。」(旧版、116—117頁)

そしていったい人の人にたいする信頼をもちや失ったとされるその極限の深層をつかむには、菅の引用をもうしばらくみる必要がある。いまこの意味の人間のかぎりない洞察と共感こそが人間の自己同一とはなにかを解くための深刻なカギだからである。

「自己自身についての絶望のなかで自己自身に閉じ籠っている人は、かならず……かれは人間として申分なく人びとのあいだに生活することができ、かつこれら人びととまったくうち解けて交際することさえできる。ただかれは、自分の自己がどういう状態であるかというその内面だけは、だれにも、たった一人の人にもうち明けない。(中略) さて、われわれの絶望者は、自分を非常にうまく閉鎖しているので自分に関係のない人(したがってすべての人)をすべて自分の自己に関する

ことから遠ざけている、—しかも外面は、かれは全然、世間の要求どおりの人間である。」
(同50—51頁、旧版 101—102頁)

「しかし、絶望が漸次、精神的になり、閉鎖的な内面性が漸次、自分だけの独自の世界を形成するにつれて、絶望がそのかげにかくれるところの外面はそれだけまた漸次、人目につかないものになってくる。というのは絶望が精神的なものになればなるだけ、それだけまた絶望者自身は、悪魔的な巧智をもって、絶望をその閉鎖された状態のなかに秘めておくことに心を配るので、したがってまた外面を殊さらに無造作に装い、それをできるだけ無意味な人目につかないものにするのである。

童話のなかの妖魔がだれも見ることのできない割目のなかに姿を消すように、絶望も精神的になればなるだけ、そのかげに絶望が潜んでいようとは、だれにも思いつかないような外観のなかに住むように心を配るのである。それによって絶望者は、いわば現実の背後に絶対に、自分一人だけの世界を確得するので、そこで、絶望せる自己は休みなくタンタロスのように、自分自身であろうと意欲に没頭しているのである—そして、そのように自分だけであるということがまさに精神なのである。」
(同51頁、旧版 118—119頁)³⁾

〈資料について—解説〉

「人生の論理」の「現象的説明」の各説は、14号で述べておいたように、一 愛 二 憎しみ 三 競争意識 四 孤独 五 羞恥 六 弱い魂 七 世間 八 卑屈 九 禮儀 十 成り上がりと成下がり 十一 たいくつ である。前号のものは、社会批評と通俗性にたいする批判をもった 一 三 七 八 をとりあげたが、本号では 四 六 十一を資料掲載とした。

この3篇は、人とのあいだに生きるのが人間であるかぎり、なにに人がなやみ、苦しみ、むなしい思いに襲われるか、その内の奥を探った

菅の心理分析の結晶といってよい。たぶん1940年代の時代状況を反映した自己分析を経たものだけに、今日的な問題に接続していてゆさぶられる思いがする。

人間はどんなときに、どのようなおそれと弱さのなかでなやみぬくものか、その疎外の回復と自己同一への人間ドラマを描写して無類である。

ちなみに三木清に「人生論ノート」(1941年刊)がある。よみくらべるなら、三木のには、菅と同じものがあるものの、いくつかの点でちがったものがある。興味をひく課題でもある。

なお、四 孤独 のうち網かけのものは、出征時、執筆したノート原稿ではなく、戦後、シベリア抑留から帰って、衆参特別委員会出席への対応、その問題状況のなかで加筆した部分である。このほか、草美社刊には、菅自身がその切迫した体験をにじませた加筆があるので、両者の検討をころみながら、あらためて菅の戦後史に迫ってみたいと思う。

四 孤独

「どんなに理くつをつけて見ても、孤独は恐ろしいものだよ」(「三人姉妹」のチェプトウインのせりふ)。

「一般の孤独への衝動は、精神の兆候であり、精神を量る尺度である」(キエルケゴール「死に至る病」)。

自分が否定され、自己同一が損ない失われる時、人は不快を感じる。この不快は、自分のほうはそれを否定する力がないのに、自分を否定するものの側では数を増して行って、自分のまわりのすべてのものが自分を否定する—仲間はずれにし、爪はじきするようになると、「孤独」とよばれるのである。人はまわりのものの否定性のために萎み縮まってゆく。「心細さ」「肩身の狭さ」をかんじざるをえなくなる。

漱石は「文学論」序で、ロンドンにおける自分のありさまをこう描いている。「倫敦に住み

暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あわれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油のなかに、一滴の水となって辛うじて露命を繋げるは余が当時の状態なりという事を断言してはばからず」
こうゆうあり方において人はやるせない孤独におそわれるのである。（以下、ドストエフスキー「死の家の記録」、漱石「我が輩は猫である」、芥川「鼻」、啄木「我を愛する歌」、「アミエルの日記」、ゴーリキ「幼年時代」などから、孤独の心象を描いている。－中略）

ブウブイエ（注．「アミエルの日記」を編んだ伝記作家）は、アミエルの日記について語っている。『（アミエルは）「わたしは少年時代に一人として慰め手を持たなかった。わたしよりも優れて、わたしを理解し、わたしの力を強めてくれるような人を持たなかった」と、二十五才の時にいつているが、それから間もなく自分の優しい心をひどく苦しめたこの欠乏にたいして救済手段を発見した。この優れた友人、この指導者、勧告者、審判者、激励者、つまり自分の孤独を充たし、自分の元気をつけるような言葉をかけてくれる者をこしらえた。それが「日記である。」アミエル自身はいう。「日記は、孤独な人の打明相手、慰安者、医者である」「日記は、打明相手の代り、すなわち友達の代り、妻の代りになる。……一時の痛止め、散らし薬、切抜け策である。」（中略 以上に（１）～（５）の文章項目がある。）

（６）だが、自分ひとり相手のこの「孤独地獄」は、ふつうの魂には、とうてい長く堪えられない。ツアラトウストラ（注．ニーチェのいう超人）がいつている通り、『しかしいつか孤独はおまえを疲労させるだろう。いつかおまえの矜持は膝ざまずくだろう。おまえの勇氣は難破するだろう。いつかおまえは叫ぶだろう－「自分は淋しい」と。』そして多数者に頭を下げて頼みこむ。

「今までのわたしは悪うございました。こ

れからきつと心を改めますから、どうぞあなた方の仲間に入れてやってください。」こういう人についてキエルケゴールはいう。『彼はいわば自分の自己を「他人」から貰い受けるのである。そのような人間は、自分のまわりにある多くの人間の群を見、あらゆる世間的な事柄との関係の中に入りこみ、世間のやり方を理解するに及んで、自分自身を忘却して、自己自身に委ねることを敢てせず、他人と同じようであることがずっと楽でずっと安全だというような気持ちになる－こうして彼は、彼自身であることの代りに群集の中の一単位に墮するのである。』そして「小石のように滑らかに擦り減らされており、現行貨幣のように通りがよく」なる。（注．斎藤信治訳 旧版「死に至る病」52－53頁）

（７）だが、そのような孤独の境遇にあって、くずれ参らぬ特異な魂もないわけではない。かれもやはり多数者に否定される。そしてこちらの方は、この多数を一举に、また直接に否定し返す手だてではない。だから孤独の境遇に追いつめられるわけである。けれどもこの魂は参らない。そうさびしがりもしない。自己同一を保ってゆうゆうとしている。ときたまには暗い憂うつが胸をおそっても、すぐに追い拂うことができる。では、こうした魂の強さはどこからくるのか？なぜ彼はこのようにたくましく自己同一を保っていられるのか？ それは「自信」があるからである。

例えば漱石の便り（明治39年野間氏宛）にあふれるような自信。「現下のごとき愚かなる間違つた世の中にて正しき人でありさえすれば必ず神経衰弱になる事と存候。是から人に逢う度に、君は神経衰弱かときいて然りと答えたら、普通の徳義心ある人間と定める事に致そうと思っている。今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は、金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らず20世紀の輕薄に満足するひょうろく玉に候。」「百年の後、百の博士は土と化し、千の教授も泥と変ずべし。……ただ一年二年、若しくは十

年、二十年の評判や狂名や悪評は毫も厭わざるなり。如何となれば、余は尤も光輝ある未来を想像しつつあればなり。彼等を眼中におくほどの小心者にはあらざるなり。彼等に余が本体を示すほどの愚物にはあらざるなり、彼等が正体を見あらわし得るほどな浅薄なものにあらざるなり。」

多数者にたいする自分の優越性の確信が、彼を支える柱となっているのである。自分は多数者よりも偉大で完全である、彼らはじつはみじめな低さにあるのである。間違っているのである。低い卑しい、または誤った彼らは、やがてはいやでもおうでも、自分に従い、自分を肯定せざるを得なくなるだろう。自分は、自分の高さ、貴さ、また正しさからの勝利を見通している。こういう思いから、ゆうゆうとした心の平らかさ、安らかさが生じるのである。（以下ニーチェ、ゲーテ、「ヨハネ伝」、漱石「野分」、カント「判断力批判」からの引用等を略）

（8）けれどもそのように、多数者の方がいけないんだ、自分は間違っていない、これでいいんだ、と自分にいいかけながらも、やはり多数者がこちらを肯定し受け入れざるを得なくなるときを、のんきに心平らかに待っていられない人もいる。自分を爪はじきする多数者がしゃくにさわり、憎くてたまらない。つまりはやはり気が短く魂が弱くて否定性に敏感で傷付き易い、そのためひとりで生きることには耐え難い、というわけなのだろうか？「野分」の高柳君の場合がそうである。

「彼は一人坊っちになった。己に足りて人に待つ事となき呑気な一人坊っちではない。同情に餓え、人間に渴して遣背なき一人坊っちである。然し自分を一人坊っちの病気にした世間は危篤なる病人を眼前に控えて嘔いている。世間は自分を病気にした許りでは満足せぬ。半死の病人を殺さねば己まぬ。高柳君は世間を呪わざるを得ぬ。」

けれども孤独者にこういう焦りは毒である、禁物である。自分を否定する多数者を今すぐに

やっつけて否定する－これは無理である。鈍い視力を持ち地べたにはっている彼らが、きみの高さ、正しさを認めるのには、長い時間がかかるだろう。それなのに、「今すぐに」というなら、きみは、きみの方から彼らのところに降り寄り、彼らが自分たちの生き方とするところについて、彼らと争わなければならないのである。しかしそのことは君にとって二重の悲劇である。

第一に、きみは彼らのところに降り寄り、彼らと一所になるために、身を落とし卑める－自分を不完全にし否定することになる。第二に、人はおのおのそのところであってこそ強い。生きる強さは、自己同一の力である。ところがきみは、自分の本領であり、したがって有利な地点である高山から駆け下りて、自分に不利で多数者に有利な平地で戦うのである。きみは破れるだろう。傷つき倒れるだろう。

このことを「野分」の道也先生は知っている。だから高柳君のいら立つ魂を静め止めようとする。－高柳君の居るべきところが世間の人びとと違ったものであることをしみじみ思い出させて、

「君は人より高い平面にいると自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊っちなのでしょう。然し、人が認めてくれるような平面ならば、人も上がってくる平面です。（以下略）」と。

六 弱い魂

「どの位わたしは傷つき易いだろう……。わたしは心臓の表皮が薄過ぎる。想像力が不安である。絶望が容易にくる」（アミエル）

弱く傷つき易い魂。気弱、内気、小心、細い神経……。論理的に言えば、他から否定され易く、また自分から自分を否定しさえする魂。そのような魂の生態をしらべてみる。

（a）一般的性格

このような魂は、自分の自己同一の確かさを信じ得ない。また、自分が完全なあり方にある

とはどうしても思いこめない。自分が否定され、自分を失うことへの不安、恐れがたえずつきまとうのである。クレペリンが「恐怖症」とよんでいる現象も、このような弱い魂のあり方に属するのであろう。彼は、恐怖症をつぎの三つに分けている。

(イ) は、個人の遭遇する不幸に対する恐怖で、病気、不運、動物、毒物等に起因する。これは、「不幸の不安」とよばれるが、人間の運命の不確かさ、生命、健康に関する絶えざる危険とむすびついている。

(ロ) は、人間の責任感情から生じる恐怖で、神や国家や職業に対する複雑な関係のみならず、また自らの罪を自ら負わうとするところから生じる。

(ハ) は、他我との交際関係から生じるもので、「交際の不安」から、自信の欠乏、自己蔑視、劣等視が生じる。

例えば、「彼岸過迄」の須永も弱い魂だった。彼は、強い魂である千代子と自分とを対比して語る。「千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである。僕にいわせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思いきった事のできずにぐずぐずしているのは、なによりも先に結果を考えて取越苦勞をするからである。」

「六号室」(注、チャーホフ、1892年作品)のイワン・ドミートリィチは思うー「自分には何の犯した罪の覚えもなかったし、将来も、殺人や、放火や、盗みなどを働く気ずかいのないことは保証できた。けれどもふとしたことから心にもない罪を犯すようなことがそれほど困難なことだろうか？ 人のざん訴とか、最後には裁判のあやまりというようなこともあり得ないことだろうか？」(以下の引用を略)

こうした弱い魂は、自信のなさで失敗したときのみじめさをあまりに生きいきと思い浮かべるために、思い切って自分からことを行おうと

はしない。アミエルは、自分の魂のあり方をよく知っていた。

「わたしが実行にたいしてまるでだめなのは、あまり周到でありあまりびくびくし過ぎるからである。」「おまえは自分で満足する見込みがないものだから、それを試みることにさえ断念する……生きず闘わず、行わずすむこと、これがいつもおまえの秘かな願いである。おまえの十字架は、意欲することであり、おまえの嫌悪は思いきってやること、むしろ冒険することである。」

たといぜひともしなねばならぬ事柄であっても、それにぶつかることをできるだけ延期しようとする。わざとまわり道をし、道草を食うのである。そして、易しくて自分にもけっこうできること、したがって自分がくずれ傷つかないで済むようなことにかがづらうのである。アミエルは、自分のこうした生き方をみのがさない。「わたしは、いつも肝要なもの、大きいもの、重いものをとっておいて差当り、くだらないもの、きれいなもの、可愛いものを片づけようとしたがる……自分の延期から、いつも序言、前置に留まって、製作にとりかかれなくなっている。」(中略)

そして、こうした自分の行いや仕事についての不安や恐れは、必ずしも未経験のものについてだけ感じられるわけではない。弱い魂にとっては、あるものごとに慣れること、なかなか易しくはないのである。このような魂が例えば教師でもなったら、何年経っても、授業に重苦しさを感じ、教授案をなんども書きなおさなければならぬだろう。

また、弱い魂は、事実、脆ろく自分を否定され、自己同一を失うのである。すぐに傷つき破れるのである。健康な人ならむしろ快く感じる春風でも、弱い身体には風邪のもとになる。そのように、普通の人にはなんでもないことが弱い魂を傷つけそこなのである。

「神経」のよわった芥川龍之介は、斎藤茂吉への便りのなかでこう書いている。『「無用の

もの入るべからず」などと申す標札を見ると、末だに行手を塞がれしような気のすること少なからず、世にかかる苦しみ有之べきやなどと思ひおり候。』（以下略）

（b）他人とのかかわりにおける弱い魂

他人は自分ではない。まだ自分は他人ではない。けれどもこれだけではただの差異関係である。別に自分を倒しほろぼすという対立関係ではない。具体的、実質的否定ではなくて、抽象的、形式的否定性である。けれどもその抽象的、形式的否定性だけで、もう弱い魂はふるえ動くのである。自分がだまされたり、嘲けられたり、引きずり下ろされたりすること一つまり否定されることへの不安と恐れとで湧くのである。だから弱い魂にとっては、他人と触れ、他人と話を交えることは、まるで手術で受けるみたいな苦しみである。（以下「死の家の記録」「六号室」の事例を略）

それから、エミール・ベルナールの「回想のセザンヌ」によると、セザンヌは「世人は何とも思わないのに、正当か不当か知らないが、何かにつけて周囲の人々が翁を誘惑するもの、だますものとばかり取っていた。」そしてこんな話がのっている。

彼があるとき、セザンヌとともに歩いた。セザンヌがよろめいた。そこで彼は、思わず支えようとしたのだが、「その手先が翁の身体に触れるか触れないに、非常なけんまくでどなり出し、自分をにらみつけられた。……まるでわたしが翁の命を取ろうとでもしたかのように。」そして『口のなかで翁は、「誰かにさわらせるか、誰に引っかけられるものか。どんなことがあったって、断然」とつぶやいた』これもやはりセザンヌが他人に触れられることが、ひどく自分が傷つけそこなわれるように感じる弱い魂だったろうか。

このような弱い魂も、他人にべらべらおしゃべりすることがあるかもしれない。しかしそれは、他人とさしむかいでいることの息苦しさを

逃れようとするあがきなのである。他人を自分以外の物事に向けさせようとするトリックなのである。だからそこにわざとらしさがある。

（略）しかもまた、弱い魂が他人とどんなに長く付き合っても、それに慣れ、平気でこれを取り扱い得るようになるには、難しいことなのである。他の人の否定性は、これに接する度毎にやはり新たに感じられるのである。（中略）

このように弱い魂は、別にこちらを否定するつもりない他人一般にさえ否定性を感じるのだから、他人が少し強く否定性をあらわにして迫ってこようものなら、もうとうてい自分を支えきれない。どんなに自分に不利でつらいことであっても、他人に従い、他人を肯定してしまうのである。自分にできないことが分かっていることでも、つい受け合ってしまうのである。「本意をまげ」「心ならずも」という自己否定をいつでもやっているのである。（中略）他人に邪魔ものとみられているんじゃないかと思うと、彼の腰は落ちつかなくなる。自分の坐るべきところがなくなるのを知りながら、つい立ちあがって他人に席を譲ってしまうのである。混んでいる食堂では、ろくに噛まず、また食べ残して席を立つ。自分が新聞をみているとき、近くの人の読みたそうな眼にぶつかると、彼の手は自然に新聞を離してしまうのである。そしてやはりこの他人の否定性を拡大して感じる気持ちから、自己卑下、自己劣等感が湧いてくる。他人の自分にたいする優越感がひどく大きいものとして眼に映り、そこにひき比べて自分の至らなさが痛く身にしみるのである。（以下かなり略）

（C）けれども、弱い魂だって生きてゆかねばならない。自己同一を得、また保たなければならない。どのようにしてか？

（1）弱い魂も、はじめは自分の弱さ、脆さを認めようとしなのかもしれない。弱さ、脆さは不完全なあり方であり、自分をそのようなあり方において認めることは、みじめな不快を

感じさせるから。かえって、彼は自分の強さを示すことに努めさえするであろう。気の弱い子どもは、臆病、小胆と思われたくないために、ナイフで自分の指を切ったり、高いところから飛び降りてみせる。「大言壮語」し、「豪放らしく」そうに見える人が、そのじつ恐ろしく気が小さく細い性質であることは、しばしばあることである。

(2) けれども、偽装は長続きしない。やがて弱い魂は、こと毎につまづき倒れる自分の弱さ、脆さを認めなければならなくなる。そしてそのように偽らない自分の魂のありさまをよく見つめるときにこそ、しみじみそれを歎きもし、また自ら励ます気もちも湧くのではなかろうか。(中略)

「人間の役目は、運命を無理に従えることである。柔弱になってはいけない。男となれ、それが快活を取りもどし、同時に気力と健康を取りもどす方法である。おまえの懦弱をはじろ。……努力のみが人生に味をつける。自分が男だという気になるには、打ち克って支配し、創造して顛覆しなければならない。」

(アミエル)

そのように、積極的な活動へと自分をはげますとともに、他方では、外から来る刺激にたいせて皮膚を厚くするのだ。(中略)そしてテヌヌによれば、メリヌはその点で完全に成功したらしい。「彼の感受性は、感受性がないのではなく、まるで正反対であったのだが。」

(3) しかし、自分をはげまし強めようとするこの自家療法は、必ずしも効果をあげ得ない。そうしたとき、人は自分の生きる力の、どうしようもない限界を感じる。そして、この限界の範囲内で生きることによってしか、自己同一を得る道がないことを認める。弱い魂は自分にいきかすのである。おまえのなかでは、すべてが減少してすべてが衰頹している。しかし構うことはない。まだおまえに出来ることを謙遜の念をもって行え。(略) 弱い魂は、もう進んで自分以外のものにまで自分を拡張、これを自

分のものにするという積極的な生き方は、あきらめる。それよりも、せめて自分の今のあり方より転げおちまいと、防御にだけつとめる消極的な生き方にしたがう。現状維持がせいぜいなのである。(中略)

他人との交わりにおいても、事を構えて争うことなど思いもよらない。何らかの行動によって他人を感心させる自信もない。かえって動けばつまづき倒れやしないか、という不安のためにじっとしている。そして相手が出すかもしれない否定性に気をつけている。つまり傍観者として止まるのである。(中略)

(4) けれども、弱い魂のこうした消極的な生き方でさえ、どこまで許されるだろうか？世間の波は荒くて、きみの守る自己同一などたちまち打ち壊すだろう。また他人の眼は鋭くてどこかにきみにつけ入るすきを見つけ、きみの足もとをすくうだろう。「世に生き他人と交わるかぎり、やはりくずれ倒されるだけだ」ときみは思い知るにちがいない。それできみは、世を離れ他人は避けた孤独な生き方へ逃げもするのだろうか。(中略)

(5) ところで、全くひとりぼっちということ—これは、人間として生きることを止めたあり方ではないか。否定する他のものなしの自己同一もないし、比較なしの完全もないからだ。これでは自己同一と完全への欲望、つまり生きることが成り立ち得なくなる。きみ自身の心だって人間へのノスタルジアにうずくにちがいない—何度、泣かされてもやはり遊んでもらいたい子どものように。

そしてまた、事実、生きているかぎり、全くの孤立ということは不可能なのであって、きみの方では世間を去ったつもりでも、世間の方ではきみをそっとしておかない。きみの存在にその波はぶつかってくる。(中略)

「それでは、わたしのような魂の救われようはないではないか？」ときみはここで苦しく叫ぶかもしれない。けれども救われた弱い魂もないわけではない。

例えば、アカーキイ・アカーキェヴィチ・バシマーチキン。（注、ゴゴリ、「外套」の主人公）彼は気の弱いみじめな下級官吏であり、誰にもばかにされていたずらされるのだが、それに仕返しするどころか、それを制止することさえできないのである。けれども、彼はそんなことにまるで不感症みたいにならずに平気であり、自己同一を保っていた。ではどうしてこの弱い魂は、否定性にたいするこのような無感覚を身に着け得たか？－寫字に熱中していたからである。

自分の全部を仕事に打ちこみ、われを忘れ心をこめて働くとすれば、自分のあり方は、その仕事をしているものとしての自分しかないわけであり、自分が生きているとは、すなわちその仕事をするのである、ということになる。（中略）

そしてこのようにある仕事に熱中し、その仕事をしているものとしてよりほかの、われがなくなってしまうえば、他人にいじめられ、いたずらされるわれ、否定されるわれもなくなってしまうわけである。そんなものに引かれわずらう心の余地がないのである。したがって、自分を否定される不快も起こりようがないのである。「一心不乱」という自己同一のあり方が保たれるのである。（以下中略）

十一 たいくつ

（上略）わたしたちは、人生をダイナミッシュにとらえる。人間の基本的なあり方は、自分自身であらうろするはたらきである。そしてそのはたらきが気持ちにあらわれると欲望であり、快、不快は、この欲望が満たされるか満たされないか、したがってあのはたらきがうまく行くか、まずく行くかにつれて生じる気持ちであった。快さは、人が自分を自己同一において見いだすときに感じられるのだけれども、このことはダイナミッシュに理解されなければならないのである。アリストテレスはいつている。

「自分があるということは、何人にとっても望ましく愛すべきことがらであるが、しか

しわれわれがあるのは、実現的（エネルゲイア、すなわち生きており行為していることによって）でなくてはならない。」（ニコマコス倫理学 1168 a）

もっとくわしくいうと、快さという感じは、自分を否定するものを否定して自己同一を得るという努力、その自己同一をおびやかすものからそれを守りつづけるという緊張、にともなうて生じるのである。不快だってそうである。自分でないあり方においてあるというだけではなくて、そういうあり方に落とされられる、自分をそこなわれ自己同一を失うという働き、自己同一を得ようと努めてしかも得られないというもつれ、にともなうて不快が感じられるのである。（以下、スピノザ「エチカ」第三部 感情の定義 第二および第三、第三部 定理第五十三 があるが略）

ところが、自分のまわりに自分を刺激し、否定するものがなく、自己同一があまり長く続くときには、その自己同一は、たんに直接的な自己同一になってしまう。はたらいてえられたほんとうの自己同一ではなくなってしまう。こういうあり方では、自分自身であらうとする緊張、自己同一を得ようとする努力がないのだから、気持ちについていうと、欲望も快も不快も感じられないのである。だから物足りなさ、空虚だけが感じられる。これが「たいくつ」なのである。したがって、たいくつする人は、自分の古びた自己同一の埃をはらって試し、確かめてみなければならない。つまり自分を否定する物事にぶつかって緊張し、はたらくことへの欲求。

それでたいくつする人は、なにか変わったこと、めずらしいものをみたり、きいたりしたが。じっとしてられない気持ち、冒険への衝動を感じる。ある人にとっては、「変わった」とか「珍しい」とかいうことは、その人の動きまわり、じっとしてはいられないこと、つまり一つところ、同じ場所にいないことは、空間的自己同一を否定することであり、危険を冒すことは、自分の生活、生命を否定する物事にぶつ

かることである。つまりたいくつする人は、自分の自己同一をおびやかす否定する物事に接して、それを否定して自己同一を確保するというスリルを体験し、それにともなう快さを味わいたいのである。 啄木の歌二つ

あたらしき心をもとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよい来ぬ

長き間われに敵なし
敵恋し心
やうよく弛みたるかな

漱石は「文学論」でいっている。

「人は活動の動物なり。活動そのものはある意味において吾人の生命の目的なり……活動禁止の状態極度に達すれば、吾人は生という名ありて其实を失うに至る……（中略）」
「次に人は冒険性の動物なり。……人生の目的は生命にあると思へば、生に害なきを棄てて、好んで危うきに趨くは、一見して矛盾なるが如し。……只退いて考ふる時、此の矛盾は皮相の矛盾にして其の根底には一理の横貫するを見る。思ふに、吾人は危険その物を好むにあらず。危険その物を目的として活動するものにあらず。此の危険に打ち勝ちたる時、自己の力を自覚して、これに伴ひ生ずる快を大なら大ならしめんと冀ふなるべし。」

カントが「人間学」のなかで、たいくつについて述べていることも、だいたいわたしの考えと一致していると思う。カントによると、人の生きがいー生きる快さは、自己否定を通して自己同一を維持するはたらきにある。「自分の生を感じる、自分を楽しむとは、現在の状態を脱出するように、自分が不断に駆り立てられることを感じるのとかかわらない。」それで、そのように自分が否定されるスリルを味わせ、したがって自分をはたらかせるものをもたない人は「感覚の欠乏」つまり空虚の感じとしてのたいくつを覚える。そして自分を否定するような事

物にあってみたくなる。

「活動へ刺激する何の積極的苦痛をも受けることがない人は、……たいくつに襲われるが、これは彼が生衝動をなおも何ものかによって満たそうと努めていることによる。その人は、全然、無為に在るよりは、むしろ自分の身を毀傷する結果になっても、何事かを敢えてもなそうとするとところへ駆り立てられるまでに覚えることが往々にしてある。」

（注、カント、坂田徳男訳「人間学」岩波文庫 187－ 188頁）

こうした自己否定の極端な場合として、カントはたいくつを消すために、縊死したといわれる人をあげている。ドストエフスキは、「死の家の記録」のなかで、囚人が同一の状態で長く生活することが嫌さに試みる「運命の転換」について語っている。

「運命を転換するというのは一つの述語である。逃亡の罪に問われた場合、尋問にたいして囚人は常に、自分は自分の運命を変えたかったのだと答えるのである。この幾分、文学的な表現は、文字通りにこの行為に当てはまっている。逃亡者は誰しも完全に自由の身になれるとは考えていない。ー彼らはみな、それがほとんど不可能であることを知っているー捕らわれて別の監獄へ繋がれるなり、流刑に処されるなり、新しい罪ー既に浮浪中に犯したようなーによって改めて裁判を受けるなりーとにかくどこでもいい、ただもうあきあきした元のところ、以前の監獄でないところへさえ行かれればいいのである。（注、「たいくつ」中の本文、傍点を下線にした）

（注）

（1） 斎藤信治訳「死に至る病」は、戦後、改訂されており、同書名の岩波文庫版がある。解説は、人間の内面にひそむ矛盾、不安、その自己分裂をなまなましくとらえ、その真の「根本治療」（「キリスト教的薬剤」というのであるがー）が、キエルケゴールの思想であること

をあきらかにしている。なお、無教会主義の人物とにふれて、1930年代を前後する、わが国におけるキエルケゴールの移入の事情が述べられているので、参照されたい。原文中の傍点は、ここでは下線にした。

(2) 菅の「哲学の論理」(1950年弘文堂刊)については、13号の注(6)でふれた。なお、本書のなかで注目しておきたいのは、西田(幾多郎 1870-1945)哲学にたいする批判がなされていることである。西田の哲学体系は、大正期以降、その精力的な著作活動によって、一部をのぞけば、ほとんど批判らしい批判をよせつけなかったことはしられている。菅の西田批判は、この時期、おそらく唯一のものと考えられる。

西田によれば、「もの」(個物)と「もの」が相互にはたらくのは、「一般者」(「弁証的一般者」、または「絶対者」とよぶ)の限定的なはたらきによるとされ、この「一般者」のはたらきがあって、その両者を媒介し、関係づけることができるとされる。だが、菅の主張はこうである。

『(上略)ものは(もの自身)はたらくことによってのみ「独立し」、自分自身になるのである。はたらくことによってどこまでも内面的

なのである。ものは、はじめから、また必然的にはたらくものなのである(中略)だから別にものはたらかせ関係づける第三者の存在など必要はないのである。(以下略)』(46頁)と。

菅は、西田のいう「絶対者」「一般者」に大きな「カラクリ」がある、という。こうした「第三者の存在」に、西田の国家観(天皇制国家を「勝義の国家」とする)をするどくとらえていたことはあきらかであり、これをふみこえて、「もの」が相はたらき、その対立・矛盾を止揚するものとしての市民的な共同社会を追求していたのが、戦中の菅の問題設定だったと考えられる。(拙稿「戦争下の教師の記録 学徒菅季治—その哲学と思想」太田昭臣教授退官記念論文集刊行委員会編 琉球大学、書名は未定 1996年3月刊予定、節題は、1 哲学徒菅季治—その生涯にふれて 2 戦局のなかに学徒出陣へ 3 人間の尊厳性と共同性をめざして—「もののほんとうのあり方」について 4 歴史の進歩と人間、生きることをもとめて—人類の立場から)

(3) 以上の引用箇所等は、本文にあきらかにしたとおりであるが、全体を理解するのに、参考まで菅のものに(旧版 116-117頁)を補った。